

ピオレドール賞を審査するという事

横山勝丘（信州大学学士山岳会）

去る2013年4月、私は第21回目となるピオレドール賞に審査員として参加した。以下に、そこで感じた審査への個人的な思いと、ピオレドール賞の今後の展望を簡単に記したい。

ピオレドール賞について

そもそもピオレドール賞（Piolet d'Or）とは、フランスの登山誌モンターニュ（Montagnes）とグループ・ド・オート・モンターニュ（Groupe de Haute Montagne）の主催により1991年に創設された賞のことで、その前年に世界各地で行なわれたクライミングの中から特に優れたものを選んでノミネートし、このイベント内で勝者を決める、といった意味合いのものであった。その内容から、「登山界のアカデミー賞」と呼ばれることもあった。

しかし、そもそも登山という行為に優劣を付けるということ自体に違和感を覚えるという意見も根強く、2007年に行われた第16回のイベントでは、受賞したチョモラーリ北壁のスロベニア隊の一人、マルコ・プレゼリが式典で受賞を拒否するという”事件”があった。個人的な感想を言えば、「拒否するくらいなら最初からイベントに来なければ良いんじゃないの？」と思ってしまうが、また一方で、世界の登山界に対してそういう問題提起をしたマルコの行動は勇気の要ることだったと思う。とにもかくにもこのアクションがピオレドールの流れを変えたのは間違いないだろう。

これをきっかけに翌2008年のイベントはいったんキャンセルされ、同時にピオレドールは新たな道の

模索を始めることになった。その結果、「一隊の勝者を決定するのではなく、優れたクライミングはすべて表彰する」というものに内容を変えることになった。2年ぶりの開催となった2009年の第17回で、賞は日本隊2隊を含む計3隊に与えられ、その翌年からも、賞は複数隊に与えられるようになっていった。

2011年の第19回で、前年に私と岡田康が登ったカナダ・ローガン南東壁の初登が、グリーンランドにおけるビッグウォールフリークライミングの隊とともに受賞することになった。この年の結果もまた、ピオレドールならびに現代アルパインクライミングの新たな流れを示したものと言えるだろう。すなわち、ローガンのような古典的登山と、グリーンランドのような「よりスポーツ的な」クライミングが共存するというものだ。

グリーンランドチームの受賞には、少なからず批判もあった。曰く、ベースキャンプは海面に浮かぶヨットで、そこでは安全かつ快適に過ごすことができることだとか、標高が低いので高所の影響がまったく存在しないだけでなく、外的危険も比較的少ない、というものであった。しかし、「未知の壁をフェアなスタイルで登り、山頂に立ち、無事に下山する」という登山の原点を基準としており、整合性は保たれていたと思っている。

実は、過去二度この賞にノミネートされた立場から言えば、マルコ同様、賞自体に胡散臭さを覚えていたのも事実であった。だいたい、あるクライミングに対して審査員一人が理解できることなんて、たかが知れている。写真と話だけで、果たして他人に

4. その他（平成25年度のトピック等）

それが理解できるのだろうか？審査にはお世辞にも登山を理解しているとは思えないような人間もおり、彼らはもちろんのこと、クライマーであっても、そのクライミングの凄さを完璧に理解することは不可能である。そんな違和感に近い思いは拭えない。それに、ノミネートされていないクライミングにも、受賞したクライミングをはるかに凌ぐ価値のあるものはいくらかでも存在する。そもそも登山には発表する義務なんてない。それを、机の上でかき集めたリストの中から一番を選ぶ、というのは根本的に間違っている。

とは言え、世界中から集まった意欲溢れる経験豊かなクライマーたちが一堂に会し、一緒にクライミングをし、酒を飲む。同じ時間と空気を共有できる、それは非常に貴重な体験でもあった。そしてそれこそが、このイベントの一番の意義ではないか？という思いはこの頃から持っていた。このイベントは、一番を決める場ではない。様々なクライミングから生まれた経験を皆と共有しあい、登山に対する理解を深める、というのが表向きの意義といったところだろうか。

こんなことを書いて良いのだろうか、とも思ってしまうが、もともと我が横山家は2013年の春にフランスのフォンテーヌブローでボルダリングツアーをする計画を立てていた。そんな折、知り合いが「ピオレドールの主催者が審査員を探しているらしいんだけど、審査員になってみない？」と声をかけてきた。「これは！」と色めき立ったのは言うまでもない。なぜなら、元々計画していたフランスに「タダで」行けてしまうから。それに、「美味しいワインとチーズがタダで食べられる」「様々な意欲溢れるクライマーと仲良くなれる」という、そんな不純な動機だけで私は審査員を引き受けたのだった。

第21回ピオレドール賞の経緯

例年であれば、審査員は6名以上、その中にはクライマーもいればジャーナリストもいる、と言った形なのだが、今回はさまざまな都合上、審査委員はアルピニストのみの4名と決まった。まあ早い話が、予算が不足していたのである（個人的にはフランスに行けるといっただけで満足なので、この部分についてはどうでも良い話なのだけど）。スティーブン・ヴェナブルズ（イギリス）が2006年に引き続き審査委員長となり、以下、ガリンダ・カルテンブルナー（オーストリア）、シルヴォ・カロ（スロヴェニア）、横山勝丘（日本）の3名が加わり、1月下旬からノミネートの選考が行われた。

まず、膨大なリストが送られてきた。これは前年に行なわれた世界中のクライミングリストで、その内容は、標高の低い岩壁でのルート開拓から、8,000mの高所登山まで、多岐にわたっていた。私たち審査員チームは、そのリストの中から主だったクライミングをピックアップした。

実は、この作業こそが今回の審査において最も重要な時間だったと言える。なぜなら、我々審査員たちは、主催者側から「今回はノミネートした全チームに賞を与える」ということを知らされていたからである。つまり、ここで選んだクライミングがすなわち、今年の実績者ということなのだ。数度にわたるメールのやり取りの中で、相応しい隊が徐々にふるいに掛けられていく。その結果、数十のリストの中から最終的に以下の6隊に絞り込まれた。

- ・ カラコルム ナンガパルバット (8,125m)
マゼノリッジ初縦走 (イギリス)
- ・ インド カメット (7,756m)
南西壁初登攀 (フランス)
- ・ カラコルム オーガ (7,285m)
南東壁初登攀 (アメリカ)

- ・ カラコルム ムスターグタワー (7,284m)
南東壁初登攀 (ロシア)
- ・ ネパール キャシャー (6,770m)
南ピラー初登攀 (日本)
- ・ インド シヴァ (6,142m)
北東ピラー初登攀 (イギリス)

イベントは4月3日の夜からシャモニで始まり、翌日は数パーティーに分かれて山でのアクティビティが行われ、お互いの親交を深めた。5日は朝から各ノミニーによるプレゼンテーションが行なわれた。前回参加しても思ったことだが、このプレゼンこそがイベントの神髄である。なぜなら、選りすぐりのクライミングをした当事者が、自分自身の言葉で自分自身のクライミングを語るのだ。聞く側として、これほどの贅沢はないと思う。先にも述べたように、だからと言って彼らのクライミングを100%理解することは不可能だ。ただ、彼らの報告を聞くことによって、クライマーは想像を膨らませては手に汗を握り、そして報告の終わりにはより大きなモチベーションを得ることができるのだ。ここに集う者たち皆が、それぞれのクライミングの報告にくぎ付けとなっていた。

このプレゼンが終わると、審査員だけが残り、選考となった。とは言え、前述のとおりすでに受賞者は決まっていたので、取り立てて議論することもなかった。ただ一人、審査員二人の欠席（シルヴォとガリンダ）を埋めるべく、急遽ピンチヒッターとして審査員となったヤニック・グラジアニ（フランス）だけは、全隊受賞という話を聞いて、目が点状態であった。

それから一行はクールマイユールに移動して、巨大な会場で今年度の受賞式典が行われた。発表は誰もが少なからず緊張する瞬間だが、今回はサプライズである。審査委員長のスティーブンが言う、「今年

は全6隊が受賞である」と。一瞬、会場には戸惑いの空気が流れたが、次の瞬間、大きな拍手と歓声に包まれた。

全隊受賞までの経緯

最終的に全隊受賞の決め手となったのは、どの隊も未登のラインから山頂に立ち（マゼノリッジは全行程トレースされているが、繋げて登ったのは初めて）、そして別のラインを下降したこと。スタイルの違いや山の難易度、標高の差こそあれ、全てのクライミングが受賞に値すると判断した結果である。というのが、表向きの声明であった。たしかに今回は、そういう声明を発表しても違和感なく受け入れることができそうな6隊のクライミング内容であった。どのクライミングも非常に質が高く、また、比較するにはあまりに内容が多岐にわたっていた。8,000mの長期にわたる縦走と、6,000m台のテクニカルなクライミング。または軽量速攻のクライミングと、重荷を背負って悪天に耐えた重厚な登山。これらが同じ土俵で評価されるということ自体、無理があると言うものだ。

しかしそれ以上に、「一番を決める」という行為そのものへの違和感が主催者側ならびに審査委員の間にあったのが最大のきっかけとも言える。

審査委員長のスティーブンにしてみれば、2006年のピオレドールで一番を決めなければならないという重圧が相当あったようだ。なぜなら、その年に賞を取ったアメリカ隊のナンガパルバット・ルパール壁以外にも、技術的難易度やコミットメントの部分においてそれに比肩するか、もしくは凌駕するほどの内容のクライミングはあったのだと言う。

当然、それぞれの審査員の中にだって、「これが良い」という好みや優劣（と言っていいのかわからないけど）があるのは事実だ。しかし、それをすべて

4. その他（平成25年度のトピック等）

胸にしまっても、そして誰が何と言おうと（特にマスコミ）、「この6チームすべてが受賞者だ」と言い切る責任がある。これまでの流れをすべて断ち切り、新たなスタイルでピオレドールを継続していくという意思決定は、主催者全員の熟考の上に成り立っているのだから。

発表後の、各隊の反応に違いがあったのは面白かった。オーガのアメリカ隊は、二人して大はしゃぎ。「ジャンボ、最高の選択をしてくれたなあ〜！」と抱きついてきた。一方で、ムスターグタワーのロシア隊の表情は浮かばない。彼らにしてみれば、このイベントで「一等賞を取る」ことがすなわち、ここに参加することの意義だったのである。

ノミニー選考に関する私見

今回も、これまでどおりのルーティンによってノミニーが選考された。すなわち、膨大なクライミングリストの中からノミニーに相応しい隊を選考するというものだが、これはまた、少々乱暴な作業だったと言わざるを得ない。山域・山名・標高・ルート名・登攀距離・難易度・メンバー、それに数行の要約だけを頼りに審査員は選考していかなければならなかった。

事実は、主催者側とリストをまとめたジャーナリストの間で、おおよそのノミニーの青写真は定まっていたようだ。それに対して、審査員がお墨付きを加えるという言い方の方が適切かもしれない。もしかしらこれは、「全体受賞」が先に決まっていたため、「間違った」ノミニーを選出しないための予防策だったのかもしれない。「そんな少しの資料と議論だけで決定してしまって良いのか？」とも思ったが、結果的にはほぼ全員が納得できる6隊に収まったと思っている。

私の選考基準はいくつかあったが、早い話が、個

人的な興味が湧けば候補として残したかった。たとえばノミニーからは外れたが、ヘイデン・ケネディとジェイソン・クルックによるセロトーレ南東稜のクライミングだとか、下降中にボルトを叩き落したことだとか、その後のオーストリアチームによるフリー化だとかは、「ぜひ話を聞いてみたい」と思えるものだった。

過去のピオレドール受賞者のリストを見ると、「初登」というキーワードは常に付きまとう。もちろん初登にはそれだけの価値はある。未知の領域に足を踏み込むというのを前提に、冒険は成り立っているからだ。しかし、未知の領域・未登の壁というのは、まだ残っているにせよ、少なくなってきたのが現実だ。もし今後も同じ判断基準でしかノミニーを決定しないのであれば、これまで誰も見向きもしなかったようなチンケな壁か、もしくは金にモノを言わせて、とんでもない僻地にある山に向かうかのどちらかになってしまう。

私の個人的な考えを言うと、初登でなくたって、価値のあるクライミングというものは存在する。上記のセロトーレにおける2隊のクライミングがまさにそれである。今回は賞は与えられなかったものの、そのクライミングについて言及するということが一定の支持を示す形となった。しかし、ピオレドールが一番を決める場でないのであれば、これら二つのクライミングもまた、受賞に値するというのが私の思いでもあった。彼らは、セロトーレという世界で最も印象的な山の、最も印象的なラインを、最も印象的な登り方で登ったのだから。さらに付け加えて言うと、未来への良い手本となるクライミングだった。今後は、そういう部分にも焦点を当てるべきだと思う。

そういう意味では、受賞はしなかったものの2008年のデナリ継続は価値のあるクライミングだったと

いう自負がある。それまで誰もそういう考えでデナリという山を捉えたことがなかった。そこに新しい基準を持ち込むという意味で、それは初登に値するものだと思うからだ。印象的な壁、印象的な未登のラインは徐々に減っていく。そういう時こそ、新たな基準を生み出し、それを実践することは今後の登山界にとって大切になってくると思っている。

ピオレドールを終えて・今後の展望

はじめは軽い気持ちで審査員なんていうものを引き受けてしまった。「他人のクライミングを評価する」ということに対しての深い思慮など存在しなかった。でも、やってみて気づいた。「いったい俺に何を評価できるのだろうか？」と。ネット上で気軽に「いいね！」をクリックするようなことなら、誰だって出来る。私だって、6隊の中から好みのクライミングを挙げろと言われれば、即答できる。本当なら、それだけでいいのだ。私は自分自身の好みだけで評価したい。「これいいな」と思えるかどうかこそが、クライマーにとって大切なのだ。とは言っても、審査員という立場になってしまうと、それができない。「あのクライミングのあれが優れている」だとか、「あれがなければ完璧だったのにな」とか、自分自身が胡散臭いと思っていた輪の中に入ってしまった！発表後、とあるジャーナリストがぼくにこう言った。「登山にコンペティションが相応しくないというのなら、そもそもノミネートするということが自体が矛盾ではないか。ノミネートされなかった隊の立場はどうなるんだ？」

ピオレドールとの関わりのなかった数年前までは、この賞を取ることがひとつのステータスのようなものなのかもしれないな、と思うこともあった。しかし、様々な立場からこの賞に関わってみて思うのは、山を知らない周囲だけが過剰にはやし立てているだ

けなんだということである。ジャーナリストにとっては、「一番」が必要なのもかもしれない。だが現在、いったいどれだけのアルパインクライマーが一番を目指していると言うのか？少なくとも私の周囲では、ロシア隊のような反応を示す人間のほうが圧倒的に少ないと思う。

登山はスポーツではない。AとBを比較する対象だって、無いに等しい。ある者は僻地のビッグウォールで高難度のフリークライミングを平然とこなし、また別のある者は標高8,000mの高みで超人的な体力をもってスピーディに駆け抜ける。登山は細分化した。そこに、自然本来の持つ厳しさが加わり、評価は輪をかけて困難になる。違うルートの優劣をつけるのが厳しいように、同じルートを登ったからって、どちらが素晴らしいなんて言える？

おりしも2013年秋、アンナプルナ南壁がスイスのウエリ・シュテックによってソロで登られた。往復28時間とは、まさに別次元の話である。そしてその直後、二人のフランス人がほぼ同じラインを一週間もの時間をかけて登った。しかし凍傷にやられ、最終的には壁の基部まで戻ってきたところでヘリコプターにピックアップされた。

一般的に考えれば、そしてこれまでのピオレドールの基準に当てはめて考えてしまえば、ウエリの方が優れ、賞はウエリに与えられることになる。でも、私はフランス人の二人がウエリよりも劣ると断言することはできない。彼らの一挙一動を、そこに関わっていない人間がとやかく言える立場にはないからだ。でもこれだけは言える。私は、ウエリの話もフランス隊の話も聞いてみたい。そこでどんな物語が繰り広げられたのか？それこそが登山にとっては重要なことから。

そして、ピオレドールはそういう物語を共有する場として存在するべきである、というのが私の意見

4. その他（平成25年度のトピック等）

だ。コンペティションの要素を減らし、良い登攀・面白い登攀とは何かということ在全世界のクライミングコミュニティの中で共有したいという意向が、ピオレドールの主催者側にもある。

であるならば、純粋に興味を引く登攀だけをノミニーに選ばば良い。もしかしたら、「ノミニー」という言葉が競争性を助長させているのかもしれない。乱暴に言ってしまうえば、イベントが盛り上がるであろう登攀を行ったクライマーたちを招待すれば良い。それだけの話だ。そしてこれは、先のジャーナリストの質問に対する答えでもある。

この賞が、それなりに注目を集めるイベントであるという観点から考えると、開催の継続のために更なる工夫が必要になってくるだろう。今年はある意味サプライズという部分でイベントが盛り上がったから良いが、当然ながら来年以降は同じ手は使えない。クライマー的観点から言えば、同じ場にクライマーが集まって、一緒に登り、語りあい、新たなモチベーションを得るというだけで意味があるのだという意見は通用するが、マスコミやスポンサーの立場から言えばそういう訳にはいかないらしい。いかにしてイベントを盛り上げるか？という部分は大きな問題なのだろう。

たとえば、イベントが始まるまで招待されている隊を公表しない、とか、プレゼンを一般人にも公開するとか、そういった工夫も必要になってくるかもしれない。まあなんにせよ、今回の決定はピオレドールの原点に立ち返ったものであり、より良い方向に向かっているものだと思いたい。

審査員として参加した個人的な感想を言えば、もう二度と他人のクライミングの審査などしたくない、というのが正直なところである。少なくとも私の芸風ではなかった。とは言え、10年ぶりとなるスキーでの無様な姿と、シャモニ後のフォンテーヌブロー

があまりにも印象的だったので、結果的には「行ってよかったなあ」と思っている今日この頃である。